

小田原史談

第47号

小田原史談会
市内3-22
小田原文化館内
所
小田原
郷土

地名と郷名

—酒匂・和戸・足柄—

立木望隆

はじめに

この小文は、郷土古代史
解明への、一つの手がかり
として掲げるものだが、多
少強引のきらいがある、と
自分でも反省している。し
かし思い切って提案しない
かぎり、そして一つの意見
を取りあげて甲論乙辯を
しないかぎり、問題はいつ
も停頓するか、うやむやの
うちに終るか、とにかく進
歩がない。そんなつもりで
読んでいたといて、大方の
叱声と御教導を期待するも
のである。

酒匂という地名

について

酒匂という地名が、はじ
めて記録にあらわれるのは

鎌倉時代をいくらかもさかの
ほらないころだと思われる

風土記によると、鳥羽天皇
の御代(一一〇七〜一一二
三)箱根権現社領として「
酒輪郷」を同社へ寄進した
ということがみえている。

鎌倉時代に入ると、酒匂は
一宿駅として栄えていたの
で、源平盛衰記、東鑑、曾
我物語、海道記などにしば
しばその名が出てくる。こ
とに海道記や阿仏尼の十六
夜日記などには、宿駅のよ
うすが活写されている。

さて、酒匂(さかわ)と
いう地名はどうして起った
のか、まず風土記によると
つぎのようなことが出てく
る。

その一つは、日本武命が

東征の際、いまの酒匂川を
渡ろうとして、川の神に神
酒をそそいだところ、その
酒が匂って、しばらく消え
なかつた。そこで「酒匂」
と名づけた。

さすがに風土記の記者も
この地名説話には苦笑して
これは「匂」という字を「
匂」と誤って、それから憶
測したのでこんなバカバカ
しい話が起つたのだ。と解
説している。

その二は、酒匂の東海道
側の民家の前に幅三尺ばか
りの小川があつて、この水
が西の方へ逆流するので、
逆川(さかさかわ)といふ
この逆川が「さかわ」とい
う地名になつたのだ。と記
している。これも風土記の

記者は、とるに足らない説
だとしている。しかし、巾
三尺の小溝は別として、多
少この説には気をひかれた
とみえ、次に海道記の一文
を抜粋している。

お知らせ

三月末で四十一年度
の会費が切れます。
四十二年度分の会費を
納入して下さい。
会費年額三六〇円

「道は順なれども、宿を
逆川と云所に泊る、汐の
さすとき水の上さまに流
るれば、逆川といふ(海
道記)」とある。しかし
これも結局否定して、い

まは逆になど流れたこと
をみたことがないといっ
ている。

風土記の記者が「南注目
したのは「南留別志」で
『岸和田、岩和田、佐川
田など地名に「わだ」と
云は、曲の字なるべし、
海川のまがりめと見ゆ』
として、此の酒匂も川が
海にそそぐ所が大きく曲
っている(天保年間)
は河口の上手で大きく曲
て流れていた)そうした地
形から生じた地名であらう
か、古く、匂とは句の俗字
で、説文に句は曲りとい
意である、などと詳しく考
証した。そしてこの説を支
持し、結局「さかわだ」と
いうべきところを「さかわ

と略したのであらう。と
した。
近ごろ酒匂をどう書いて
いるかという、たいにい
が酒匂と、匂字をあててい
るようだ百三十年前に風土
記の記者が正したような精
神はとんと何処かへ置き忘
れて、誤字をあててすまし
ているのは、いかにもなさ
けない。だいいち、「匂」
と書いて、いったい「わ」
とよめるだらうか。

そこでわたくしだが、わ
たくしは、少々持つて廻つ
た考え方をしている。単的
に云えば酒匂という地名は
姓氏から出たものではない
かと思うのである。正倉院
文書のなかに、封戸交易帳
というのがある、その天
平七年十一月十日の日附の
あるところに、相模国掾と
して、正六位勳十二等酒波
人麿という名を挙げてい
る場合、酒波は「さかな
み」とよんでいるが、これ
は元来は「さかわ」であ
たのではないかと思う。酒
波は「わ」は「さ」はよま
ない、と、わざ／＼教示して貰
たこともあるが、阿波(あ
わ)久波太女王(くわわた
久波比売(くわひめ)その

他類別があるので、その古
くは酒波(さかわ)と訓ん
でいたとしても差支えない
ようだ。
さて、当時の国司は、守
とか介とか最高官となると
遙任と云って、守には任命
されたが中央に居って、実
務は、その地方の豪族を登
用し、介とか掾とかの位に
つけ、この者にゆだねてい
た、という時期がある。
酒波人麿の家系について
は少しも知ることが出来な
いが、しかし我が酒匂平野
中の切つての豪族だったと
考えて差支えない。いま酒
匂の上醍寺に、開基酒匂右
馬頭の墓という巨大な五輪
の石塔婆があるが、ちが
つた考え方をすれば、或は上
代の酒匂氏の後裔ではな
かつたかとも云えうだ。し
かし鎌倉時代に入ると、土
着、或は領地を安堵しても
らつた武士が在郷の名を家
号(家名)とするようにな
つたので一概に云いきるこ
とは出来ないが。
そこで、もとへ戻って、
それなら天平七年にあらわ
れてくる酒波氏は、いった
い何処が本貫のところかと
いうに、わたくしは足柄上
郡南足柄町、開成町、小田

原市久野坂下このいづれかのうちの何処かではないかと思つている。その理由の一つは、さかわとは、元來酒波でもなければ酒勾でもなく、強いて漢字をあてれば坂曲とも書くべきが本來で、その意味は坂が大きく輪廻つた下にひらけた土地、そこを坂曲といふ、そこに居住した豪族なのでさかわと名乗つた。と思つて田村という所があつたが、これは逆田でもなければ酒をつつた田でもない古道のぼる坂の下の田なのでさかたとよんだに間違ひなからうからである。こうした意味で酒勾氏を考えるのには、やはり足柄古道が坂に登る位置をまず取りあげべきで、ことに、班目や牛島方面では古く高野牧(たかやのまき)があつたとも云われ、ここを酒田村などと呼んでいるのは、可成り注目される。小田原市久野坂下の場合、ここにミヤケが置かれ、田子(多古)たちの部落が早くにひらけ、殊に一号古墳をはじめとする後期古墳群を附近に持つ位置で、このあたり早くに郡司級の豪族が住

んで居てよさそうに思つて居る。あとで詳しく触れるが、足柄の本郷の所在地は此所ではなかったとわたくしは考へて居る。さて、いづれにしても酒波氏はこの平野の豪族であつたに疑いはない。大化の改新後国郡制の確立とともに、相模の国府は、初めに小田原の府中(上下)に設置された。この府中を、旧師長国、国造(くにのみやつこ)の国府のあつたところと多くの先学は述べて居るが、これは当らない、初期さがみ(中途で焼亡)が現在の千代を中心とした地に置かれたことは、ほど間違ひがない。これは全国の府中と名付けられた地をみれば容易になづくことが出来るだらう。土豪酒波氏は、府中の辺に

の庁舎が設けられると共に、相模掾という位をもらつて、その庁舎の近くに居館を移した。この地が現在どこがわからぬにしても、いまの酒勾の何処かであつたことはまちがいないであらう。そこでこの地を酒勾(さかわ)と呼ぶようになったのだと、わたくしは考へて居る。これをも一つには、酒波氏の旧地を他にわざわざ求めないで、そのものずばり、もと／＼酒勾に住んでゐた土豪と思つてもよいがそれだと地名の起りが、坂曲でなく、佐川田(さかわだ)といった地形から生じた、という風土記の記者の考へ方に準ずるはかない。なぜ、地名が姓氏から生じたかといふのはつぎのようだが参考にする。川流域の東地区の地名をみると、そこには「曾我」「大友」「加茂」「丸」「氏」など、中央豪族の姓氏に關連した名がみられるからで、これに対して酒波氏はひとり土着の豪族であつたのではないかといふ気がする。酒勾川は古くは九子川

と呼ばれるが、なぜこゝに「和戸」と呼ぶかについては、次の和戸郷の項で述べることとする。中野敏次郎氏著るところの、小田原史料によれば、和名鈔にみえる五郷のうち、現在でもそれと指適されるのは、高田、飯田の二郷で、あとの和戸、垂水、足柄の三郷は推測するほかこれというきめ手がなく、したがって私見をもって、一応の説をたてておられる。そのうちの「和戸」であるが、いったいこの訓みはなんといふのが正しいのであらうか。中野氏は従来の説に従つて「ワド」とよぶことにし、その意は、河の渡し口が、河口近くにある地名であるとし、その位置を、郡の広さ集落分布等のつり合ひから、酒勾から飯泉の辺であらうとされた。これはまさに卓見で、さすがに郷土史の第一人者として敬服せざるを得なかつた。ただ、さきにも述べたように和戸をワドと呼ぶことに疑いがないかといふに、多少問題が残るのではないかとおもふ。

そこでわたくしだが、和戸郷の位置については全く中野氏と同じ考へに立つもの、その名称についてはつぎのような考へをもつて居る。さきの項で述べた通り、ここで酒勾川の本来の呼び名九子川(鞠子とも)が登り、酒勾川について、江戸時代以前の呼称は、大方の書物が九子川と書いていることは周知の通りだが、このマリコが、じつは此所に引出したワドに無関係でないどころか大いに關係が深いといふことを、これから述べてみたいのである。まず酒勾川をなせマルコ川、及至マリコ川と呼んだかである。それについては、井上光貞氏に陸奥と九子という論文があつて、これが非常なたすけをしてくれる(陸奥の族長、道島宿弥について、井上光貞)それによると、マルコ、乃至マリコ、或はマロコなどと呼ぶのは、六世紀の天皇の皇子方の、名代ではないか、といふことである。例えば日本書紀をみると、継体天皇に椀子皇子があり、宣化天皇の皇子の上殖葉皇子はやはり椀子皇子と称したといふ、欽明天皇にも椀子皇子がある。さらに敏達、用明の二帝にも麻呂子皇子の名がみえる。これについて家永三郎氏も六世紀の天皇のミコ達にマリコ、マロコなどが固ま

てみいだされる理由について、九子という氏姓名に着目し、結局子代名代(コンロ、ナシロ)の部民との關係に及んだ。天平十年の駿河国正税帳に、相模余綾郡散事九子部大国の名がみえるが、この人こそ現在の酒勾川流域の何処かに住んだ、九子部氏族の長ともいふべきひとではなかつたかとおもふ。万葉集巻二十に鎌倉郡上丁九子連多磨の歌が出て居るが、井上氏の調査によると平安前期までに關するかぎり、九子を氏の名とし、また部の名とする人々の分布は、東北を中心として阪東の相模國が最後で、箱根を越えた西側の沼津や、静岡市効外の鞠子その他は、この時代より後ではなかつたかと思つておられるようである。さて、簡略に結論をのべると、現在の酒勾川をマリコ、或はマルコ川と呼ぶのは、この六世紀の皇子に屬する、九子部の部民がこの川の流域に居住したところから、右の名が起つたこととは、ほどまちがいが無いその根拠地が、現在のどこに當るか、或は酒勾周辺で

丸部臣君手を別には和爾部臣君手と書いてもいるので丸部をワニベと訓んだことはまちがいがなかった。しかし丸部と、丸部が同一かという点、丸部はマルコ(マリコ)部でなくてはならず、丸部のワニベとはちがう。しかしそこで、わが和戸だが、この訓みはわたくしは、和(ワ)戸(ベ)すなわち、古くは「ワンベ」と訓んだのではないかと考えているのである。丸を

はなかつたか、とわたくしは考えているのだが東京の丸子多摩川、阿倍川のそばのマリコなど、比較的に川沿い、或は河口に近いところに位置しているのが、単なる思いつきだが参考に供しておく。

つぎに、このマリコ(マルコ)と和戸の関連性だが丸はすなわち輪であることにまず注意したい。あまり突拍子で驚かれるかも知れないが、笑いごとでなく、つぎのような純粋な学問上の討論がかって行われたことを参考に供すると、古く学者間で「丸子部」をワニコベと訓んだ例があるのである。

以上の原稿の枚数にも制限があるので、ごく簡略に酒匂の地名考、和戸郷の訓みについて述べ、一つの問題を提起してみたのであるが、はじめにのべたように、大方の教示が得られ、ば幸いこの上ない。

足柄郷、垂水郷の位置については、次の機会を待ちたいと思う。

ワと訓んだ例は右のことも理解出来るし、子は書き方によって部の字の異体のア字とまぢがわれることもあるので、丸子とあつたのをワすなわち「和」、子乃至部を「戸」と書き記し、はじめ述べたように、ワベとかワンベとか訓んだかと思ふのである。

も一つは、文字は「和戸」と書いたが訓みは「マルコ」と云っていたかも知れないのである。戸はコともよめるからでじつは、わたくしは基だ冒険だが、後者の和戸と書いてマルコと訓み、和戸郷はワドのゴウでなく、マルコのゴウと訓みたいと思つていたのである

城内井戸について

三津 木 国 輝

毎年夏の渇水期に入るとテレビやラジオで「何々地区は何時から何時まで断水いたします」と云う放送をよく耳にする。まだ我が小田原市ではそれほどではないが「水」それは人間が日常(生物全般に云える事であるが)生活をしていく上絶対に必要なものである。その水を現在都市に於いては水道により、農村に於いては井戸により得ている。

この井戸がお城の内にあると城内井戸であり、その場所を「水の手」又は「井戸曲輪」と称して一城の生命に関する重要なものである。もし城攻め際水攻めによりって城内に水が切れれば城内に兵はおられず、したがって城としての使命を、果せず落城の浮目にあうであろう。水はそれほど人にとって、又城にとって重要なものであるから築城の際には、どこの中にも一郭毎に数多くの井戸を設けたのである。特に本丸は城の心臓部であり最後

の決戦の場であるから必ず設けた。

後世城に天守閣が建立されるようになると、小天守閣内にもしばしば井戸が設けられるようになった。大阪城の金明水、銀明水などがその代表的なものである。金明水、銀明水の名は大阪城のほかに江戸城や岐阜城などがあるが、これ等はそれぞれ水を清める(美しくする)ために金銀を用いたものとされている。

これら城内井戸は平地の民家の井戸とちがひ、平山城或は山城においてはかなりの高所にあるため三十米から深いものにあつては五十米の深さを必要とするので、これを堅固とするためには、内部を城壁と同様に底部より石垣を積み重ねて作らなければならなかつた。近くに石垣山一夜城に俗称「ささえの井戸」或は「淀君の化粧井戸」と呼ばれる「井戸曲輪」があるがこれなども約二十米四方を石垣で囲まれた堅固な一

曲輪となつており、高さを

カパーするために螺旋形の道をもつて中央の井戸に達するようになつてゐる。現在石垣山一夜城で当時の石垣をそのままのこしているのはこの井戸曲輪のみである。一夜城があつたのは高所に築城されたのは第一に場所(地形)であるがそれと共に考えられるのはそこに豊富な水、すなわち井戸を設けられたからである。岐阜城があつたのも又同じに築城されたのも又同じであると思う。本丸だけで三つの井戸があるのはそれだけ立証している。小田原城においても本丸内に現在二基江戸時代末期の図面によると五基の井戸が配されてゐる。これが大城郭となると数も多く、大阪城や熊本城の如きは城内に百二、三十の井戸を設けたのである。

城内にはこれ等井戸のほかに城内の汚物を処理するために下水道を設置したのである。これは、やはり石垣をもつて横穴式に城内より堀割及び城外のはけ口に及んでゐる。その為かよく結びつけて俗に云う「ぬけ穴」と呼んでゐるが、もちろんこれは人が出入りする

穴ではない。では果して城内にぬけ穴としての井戸があつたのであるうか。大阪城や、和歌山城本丸の井戸が「ぬけ穴」であるといわれているが「いまままでに何一つ確証はなく、他にも真田昌幸の築城による上田城の井戸も「ぬけ穴」として現在も地元の人々に語りつがれてゐるがこれとて今のところ何一つ確証はない。

会員消息

退院さる
蓑田長平氏

暫く小沢病院に入院加療中だった史談会の長老、蓑田長平氏は、このほど目出度く退院、自宅で史談を執筆中、なによりでした。

内田武雄氏も全快

府中史談会の内田武雄氏もちかごろすっかり元氣を取り戻し、久しぶりに理事会に出席さる。今後の活躍が期待される。

道祖神の正月子供の行事 について

神保明峰

正月近くになると今でも子供は正月が楽しみの一つであり早く正月が来ればと思ふでせう、明治の未まで、道祖神に対する子供と云ふても男の子であるが、男子七八才から十五才迄が道祖神の為に奉仕をした。元旦から提灯屋へ一同で出向いて、例年の如くに五日頃迄と注文をする。四日には一同で各家々の門松を道祖神の前へ運ぶとして粗末な小屋を造る。それは十五才の子供を餓鬼大将と云ひその下番と云ふその他は大将の指示でなんでもするのである、五日に誂へた提灯を受け取って来て、その晩から氏子中を歩く準備にかゝる、餓鬼大将は帳面を持つてそして各家からの貰ひ銭を記したり出た金をつけたり下番ともども行方、その他は火の廻りと云う行事のおおひやら面などの仕度をするとして夜を待つ、夜が来れば餓鬼大将の家の表で太鼓を打ちならず、家に居た男の子は飛び出して行く

皆集合したらば、左之如く道順に氏子中を一軒なみに祝うのである。道歩くにも屋敷の庭へ行つても唄と太鼓はつきものである。唄と太鼓を記して見る、先づ太鼓は二人でかつぐのであつて後の方がどんどんどん——どんどんと打つ、すると唄、火のまわりさつしやい、どんどんどん間どんどん唄、用心さつしやい、どんどんどん間どんどん、唄あげておくれよ火伏のごきと、太鼓は以下同じ打ち型である。

唄、あげねーと云ふと、太鼓、唄い罰があたる、唄何の罰あたる。神の罰があたる。神のばちやしんばち太神楽のこんこばち。あんどん消して、○○でもさつせい、でっかい○○さつせ、ちっちゃい○○さつせ、こんなあたいない唄を大勢して唄い乍ら各戸へ行き七八才の子供は、福の神まい込んだ〜と、跳踊り家主は心得ているので、いくら

かの銭を出すのであり、初め仕切りだよと云うと、しよちして引き上る、仕切りと云ふのは十三日の晩にまとめて出すのであるが、あらかじめ高ははなして置くのである。こうして毎晩跳踊して、十三日迄続く十四日には子供達は集めた門

春稀雪

清水専吉郎

建國をしのぶけふしも雪白く 緑まだらに日の丸の旗
雪霞みきさらぎの空に天守閣 箱根山なみ雪にうもれむ
深雪にとじこめられし梅の花 如月なかなば匂い積もらむ
雪の空響えつ體む遠の松も かげに耐えて白く張る枝
たちならぶ垣の伊吹はしつもありて 雪絹帽子ふくよかにして

深雪のかげに赤き実のぞかせて 寒さをよそに庭の満向
牡丹雪鶴にさも似し風せいせる 庭の松が枝声たてて見
るか
かずかずの探めし石に雪つもり 手が触れやらす眺め入
るかな
ものみは雪ひと色につつまれて 人足たえしこの表み
ち

このままにいつまで続く雪景色 人の命とおなじ時限か
足あとを消して深雪の道白く なほ降りかすむ如月の空
枝々に雪絹帽子雪達磨 子供とまろぶ犬の声々
雪つもりなほ降りつつく静けさや そと出もならずうま
酒くまむ
春の雪かたまりかねてあわてつつ つくる達磨の目鼻だ
ちかな
おしななて雪は不浄を払ふらむ 豊年の歳ひのとの羊
めくまれし小田原の里まれに見る 尺近き雪ささらぎの
雪
如月の雪に城跡木々の色 白く霞みて往古をしのぶ
めづらしく降りにし春の大雪の 驚ろく景色しほし止め
む
昭和丁未如月中旬

一口辞典

問屋と人足

江戸時代のしまいのころ 小田原では、いまの間中病院の隣りに問屋場があった。人足を寄せるために、店の軒下でバクチが出来るようになつて置かされた。バクチでもやらせて置かないことには、人足の腰が落着かない。腰が落つかないといつてもすぐという急場の足継ぎが出来ない。やむを得ない措置であつた。

この問屋場の構えといふのは、広い間口を持った奥多かい家で、一段高い所に、問屋場強力(ごうりき)といふ、人足頭のような用心棒のような、腕っぶしの強い男が一人居た。この強力が人足に命令して仕事をさせる。「きょうは何様がお通りだから、人足を何人揃えろ、」とやる。人足のなかには、元来ヒ弱い者もあるし、強くて泣き事ばかり云う奴もいる。仕事の途中で、荷が苦しくなつて逃げ出す者などもあつた。途中の立場にきて、ちよつと小用をなどといつてそのまゝうすらからつて逃げた者なども出てくる。抜け逃げて逃げおそればいゝが、つかまつたらたいへんである足継ぎの采頭を賄力のように運まじしい男だらたらまらない、逃げてつかまつた人足を後ろ手にしぼり、お尻をひんまきつて歩かせようしから青竹でピンヤリ〜となぐりつけながら問屋場までつれ帰つた。尻が破れて血がタラタラ流れても平気で叩いた。ひどいものだった。と板橋の古老がよく話したものだ。大名の通行で、いちばん人足にうるさかつたのはサツマさんだったと、九十老の話しききた。

(M・T記)